日本語教育で使われる教科書について ②

天理教語学院日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

教科書は生もの

80 年代後半、天理大学別科日本語課程では国際学友会の教科書『日本語読本』巻Ⅰ～巻Ⅳを用いて授業をしていた。巻Ⅱの 15 課で「汽車の旅」という課があった。そこには次のような文章があった。「私は前日買った大阪までの二等切符特別急行券とを改札口で切ってもらい、午前九時発の特急『つばめ』に乗りました。『つばめ』は日本でいちばん速い汽車で東海道線を走っています。」（104 頁）。筆者が勤め始めた頃、すでに新幹線「ひかり」も走っていて、東京～大阪間は約 3 時間だった。この課の本文の最後は「東京から大阪まで五百五十三キロ、特急『つばめ』で八時間の旅でした。」（110 頁）

一通り新出語、新出文型の導入、練習が終わり本文を読むと「先生、これ、いつの話ですか？」と言われ、苦笑いしながら「いつの話だと思いますか。」と留学生達と会話を続けて、現在との違いについて話したりしていた。このエピソードからもわかるように、教科書の中にあるものは時代と共に変化していくことも多く、その時々において改訂を重ねていかなければならないものだと感じる。決してこの教科書を批判しようと思っているのではなく、優れた教科書でも時代と共に扱う題材などもアップデートを重ねなければならないものだと思う。黒電話から携帯電話にかわり、スマートフォンにかわり、Skype や LINE などの画像や映像付のものに変わっていくことは自然なことである。時代には関係なく普遍的な内容のものもあるが、多方面にわたり、いろいろな内容が盛り込まれている教科書であるから上記のようなことも起こるが、教師がうまく対応していけばさほど問題ではないのかとも思える。しかし、教科書で扱う題材については、時代にあったアップデートの必要性はあるようにも思う。

別科独自の教科書

『日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』

筆者が別科に勤め始めた当時、長く勤めるベテランの先生方が教材研究会を開いていた。後に使われる別科独自の教科書を検討し、編纂していたようである。別科は 2 年制であり、入学した 1 年目の学生は海外ふるさと寮に寄宿し、学校に通い、2 年目には寮を出て、それぞれが所属する教会の詰所（信者修行所）へ移ってそこから学校に通うようになっていた。寮に収容できるキャパシティもあり、2 年目からは寮を出ることになっていた。そして卒業前の 3 カ月間は天理教の修養科（3 カ月間天理にある各教会の詰所に宿泊し、修養科に通い、基本的な教理やおてふりなどを習ったりひのきしんを行う）が日本語実習ということでカリキュラムに組み込まれていた。つまり 2 年生を担当していた教師はこの 3 カ月間は授業がないわけで、ベテラン教師は教材研究会を開いて、新人教師は 1 年生の授業の手伝いにいくようなシステムになっていた。当時、留学生も教師も無駄なく動けるようなシステムが出来ていると筆者は感じていた。そして教材研究会で、別科独自のメインテキストや副教材などが開発されていった。『日本語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（天理大学別科日本語課程編）や、副教材としてコミュニカティブアプローチの手法を取り入れた『日本語Ⅰ総合練習』などがそれである。別科独自の教科書や副教材が開発され、留学生の天理での実情にもあったものができて、使いやすかったように感じていた。

天理教語学院での教科書

『みんなの日本語』（第二版）

選科・別科時代の教科書の話をしたが、今度は天理教語学院で使用している教科書について話をしたい。現在、天理教語学院では『みんなの日本語』（第二版、スリーエーネットワーク）という多くの日本語教育機関で使われている教科書を使っている。この教科書は『日本語の基礎』（海外技術者研修協会）がもとになっており、改良が重ねられ『新日本語の基礎』を経て『みんなの日本語』となった。現在はさらに改訂された『みんなの日本語』（第二版）が市販され、多くの機関で使われている。筆者がこのシリーズに出会ったのはパリの天理日仏文化協会であったが、これは本当によく考えられて作られたものだと驚いた。毎日の授業で使い込むほどに、この教科書の開発に携わった方々の工夫の積み重ねが感じられた。1959 年に設立された財団法人海外技術者研修協会で、発展途上国の技術研修生を受け入れ、彼らが日本で生活し、受け入れ先の会社や工場で研修を受ける際に必要な日本語の習得ができるように開発したのが『日本語の基礎』である。

この教科書は、わずか学習時間 100 時間で基礎的な日本語が習得できるように工夫されている。各課は文型、例文、会話、練習問題などで構成されていて、この構成は『新日本語基礎』『みんなの日本語』にも受け継がれている。海外から来る技術研修生が対象であるから、短期間で日本での生活や工場での研修に必要とされる日本語を教えなければならない。開発に当った先人の苦労が偲ばれる。技術研修生の研修先である会社や工場の協力も得て語彙を選び、研修生が入国してから帰国するまでの言語活動を調査して、無駄なく各課の構成を考えていったのだとわかる。しかし、よく考えられ作られた教科書であるのに、一般的な日本語教育の現場からは語彙の面で不満もあがっていたようだ。天理教語学院では当初からメインテキストとして『新日本語の基礎』を採用していたが、『みんなの日本語』（初版）が出版されてからは、それに切り替え、現在もその第二版を採用している。ちなみにスリーエーネットワークと天理は『日本語の基礎』時代からつながりがあり、翻訳・文法解説書のフランス語訳などを天理日仏文化協会が協力したり、現在でも天理教語学院が『みんなの日本語　中級Ⅱ』の標準問題集の作成協力をしている。